

話し手と聞き手のカートグラフィー¹⁾

遠藤 喜雄

The Cartography of Syntactic Structures of the Speaker and the Hearer

要旨

生成文法の新しい流れとして、近年ヨーロッパで開発中のカートグラフィーのプロジェクトがある。このプロジェクトは、普遍的な言語の統語構造を、綿密で詳細な地図のような形で表現する試みである。本論文では、特に文の左端に生じる談話と関連する構文を主に取り上げ、そこに働く局所性の原理を探る。具体的には、話し手と聞き手が関わる英語の付加疑問文や副詞節を論じながら、従来の生成文法では、統語構造の外の問題とされてきた現象が、実は、統語構造の内側で扱われる点を示す。また、海外では知られていない日本語学の研究が、このカートグラフィーのプロジェクトに有益であることもあわせて論じる。

キーワード: カートグラフィー、付加疑問文、副詞節、話し手／聞き手、談話

0. 序

本論文では、カートグラフィーの視点から日英語の話し手と聞き手に関わる統語現象を考察する。まず、(i) 本論が想定する統語的な枠組みである、カートグラフィーの概要を述べる。次に、(ii) 話し手と聞き手に関わる英語の現象として、付加疑問文や副詞節を考察した後で、(iii) 話し手と聞き手に関わる統語構造のメカニズムを見る。そのメカニズムを基盤にして、(iv) 日本語学における従属節の4分類を考察する。さらに、(v) 統語と談話を繋ぐメカニズムに局所性の原理が働いていることを見る。最後に、(vi) 全体のまとめと残された問題を述べる。

1. カートグラフィーの概要

まず、本論文の基盤となるカートグラフィーの概要を見よう。カートグラフィーとは、1990年代の半ばに、Luigi Rizzi と Guglielmo Cinque が共同で開始したプロジェクトで、出来るだけ綿密で詳細な統語構造 (the cartography of syntactic structures) を作成しようというのが、その趣旨である。カートグラフィーの特徴は、統語構造の豊かな記述力にある。例えば、(1 a) に見るように、カートグラフィーでは、文の統語構造を様々なタイプの機能範疇のポジションからなると考える (その内容はすぐ後で論じる)。マクロな視点から見ると、文の構造は、(1 b) に見る3つのフィールドからなる。

(1) a. [CP Force Topic Focus Fin [IP Person/Num …Tense [vP VP
peripheral field inflectional field lexical field

b. peripheral field : 話し手や聞き手も含めた「談話」が関わる情報を表す。

inflectional field : 一致、屈折、副詞等の「機能範疇」が関わる情報を表す。(金子／遠藤 (2001))

lexical field : 動作主、着点等の主題役割が表現される「語彙範疇」が関わる情報を表す。

一番左端の高い peripheral field は、話し手や聞き手を含めた談話に関わる情報を表す領域である (この領域については、Endo (2006, 2007) が詳しい。) 次に、中央の Inflectional field は、従来の文法でカバーされていた領域で、副詞等の機能範疇が関わる文法領域である (この領域については、金子／遠藤 (2001) が詳しい。) 最後に、右端の低い lexical field 領域は、語彙範疇が関わる領域で、動作主や主題等の主題役割等が表される。

本論では、この中で、特に、左端の談話に関わる統語領域を主に考察する。そこで、まず、談話研究の背景となる主な研究を概観しよう。談話領域の最も詳細でオリジナルな研究として、久野 (1978) を挙げる事が出来る。ここでは、「視点」、「トピック」「フォーカス」という「談話」に関わる日英語の言語現象がはじめて体系的に論じられた。その後も、久野 (1987) や Kuno and Takami の一連の研究 (例えば、Kuno and Takami (1993)) で談話の研究は

日英語で詳細に論じられたが、談話が統語とそもそもどのように繋がっているのか、という根本的な問いが欠落していた。その理由の一つは、談話研究が統語理論のアンチテーゼとして批判の対象にされていたことや、当時の統語理論が談話の情報を組み込めるほど十分に研究が進んでいなかった事実を挙げることができる。しかし、この統語と談話の垣根を取り払う歴史的な変革が、Rizzi (1997, 2004) によってなされた。そこにおいては、トピックやフォーカスといった談話情報が統語構造上でどのように表現されるかが、カートグラフィーを基盤にして、詳細にそして体系的に明らかにされた。Rizzi の貢献を一言で述べるならば、それは談話と統語を繋ぐメカニズムを発見した点にある。そのメカニズムとは、命題の統語領域と談話の統語領域の間に移動が生じた場合、そこに連鎖 (chain) が形成され、その連鎖を通して命題を表す統語構造と談話の構造が繋がれる、というシステムである。より詳細に述べるなら、談話に関わる左端の統語領域は、(2) に見るさらに詳細な談話に関わる機能範疇のポジションからなることが Rizzi (2004) により解明された。

(2) 談話の領域: ForceP TopP Int TopP FocP ModP TopP FinP (Rizzi 2004)
 文のタイプ 主題 何故 焦点 前置された副詞類 定形/非定形

この談話に関わる様々なポジションは、階層を成す構造を持ち、一定の線形順序で配列されている。例えば、イタリア語やフランス語といったロマンス系の言語では、肯定文等の文のタイプを表す要素 (英語でいえば *that*) が、ForceP という文の一番左端のポジションに生じる。次に、文の背景を表すトピックとなる要素がその後の TopP のポジションに生じる。そして、英語でいえば *why* に相当する要素がその後の Int のポジションに生じる。(Int は interrogative の略である。) その後に、背景以外のトピック要素が TopP のポジションに生じる。その後ろには、*why* 以外の *wh* 要素やフォーカス要素が FocP のポジションに生じる。さらにその後には、前景や背景を表すために前置された副詞が ModP のポジションに生じる。(Mod は Modifier の略である。) その後ろには、主にトピックとなる項が TopP のポジションに生じる。最後に文の定形/非定形を表す要素 (英語では *to*) が、FinP のポジションに生じる。(Fin は、Finite の

略である。) もちろん、言語により、このポジションの配列順所が部分的に異なることはあるが、基本的な各ポジションの配列順所は驚くほど似ている。また、すべての言語で、これらすべてのポジションが使われる訳ではないが、この事情は、音韻の習得になぞらえるとわかりやすい。例えば、英語では、rとlの区別をするが、日本語ではこの区別はなされない。この違いは、生まれつき与えられた音韻素性のうち、日本語と英語の子供によって、異なる言語経験を通して、ある音韻の素性だけが活性化され、残りの素性は活性化されずに忘れ去られる (learning by forgetting) ことによる。統語の様々なポジションに関しても同様に考えることができる。各言語の話者は、様々な統語のポジションを生まれつき与えられているのだが、異なる言語経験を通して、あるポジションは活性化され、残りは活性化されずに忘れ去られたり、部分的なポジションの再配列がなされた結果、異なるポジションが各言語で使用されることになる。しかし、この場合でも、機能範疇のポジションの基本的な配列は驚くほど類似しており、これは、すべての言語で基本的に使われる核になる音韻の素性 (例えば +/-voiced) があるのと類似している。

さて、命題領域に生じる主語や副詞は、この様々な談話領域のポジションをターゲットにして移動が生じると、そこに連鎖が形成され、その連鎖を通して、トピックやフォーカスといった談話情報や作用域 (scope) の解釈が付与されることになる。このように、命題領域に生じる要素が、もとの位置で付与される主題役割などの意味に加えて、談話や作用域に関わる意味が談話領域で連鎖を通して付与された結果、自然言語が2重の意味解釈 (duality of semantic interpretation) を持つことが可能となる。

2. 話し手と聞き手の副詞節

以上のバックグラウンドを念頭において、英語の副詞節を見よう。英語の副詞節は、Haegeman (2006) によると、中核的な副詞節 (core adverbial clause) と周辺的な副詞節 (peripheral adverbial clause) に分類される。この2種類の副詞節は、(3) の特徴を持つ。

(3) 中核的な副詞節：主節の表す事象を修飾／限定；主節との結びつきが強い。

周辺の副詞節：主節の背景を表す；話し手と聞き手の情報が関与；主節との結びつきが弱い。

直感的には、中核的な副詞節は、主文の一部に組み込まれた従属的な性格を持ち、一方、周辺の副詞節は、主文のような独立性を持つ。具体例を見よう。

- (4) a. If your back-supporting muscles tire, you will be at increased risk of lower-back pain. (*Independent on Sunday, Sports*, 14.10.1, page 29, col 3)
- b. If we are so short of teachers ('Jobs crisis grows as new term looms', August 30), why don't we send our children to Germany to be educated? (Letters to the editor, Eddie Catlin, Norwich, *Guardian*, 31.8.1, page 9, col 5)

まず、中核的な副詞節は、(4 a) に見るように、その表す事象 (event) が主節と強く結びついて組み込まれて (integrate) いる。そのため、文全体で一つの発話内行為／効力 (illocutionary force) を持ち、主文と共に一つの主張をしている。一方、周辺の副詞節は、(4 b) に見るように、聞き手に対して、話のバックグラウンドとなる内容や証拠を提示する (evidential) という独立した発話の力を持つ。そのため、主節は、副詞節との結びつきが弱くなり、関連はするが独立したもう一つ別の発話の力を持つことになり、全体で合計2つの発話の力を持つことになる。

次に、これら2種類の副詞節の統語的振る舞いの違いを見よう。まず、中核的な副詞節には、(5 a-b) に見るように、may など話し手のムードを表す要素や、probably 等の話し手の評価や認識を表す副詞が生じない。一方、周辺の副詞節には、(5 c-d) に見るように、これらの要素が生じることが可能である。

- (5) a. *Mary accepted the invitation without hesitation after John may have accepted it.
- b. ??John works best while his children are probably/might be asleep.
- c. The ferry will be fairly cheap, while/whereas the plane may/ will probably be too expensive.
- d. If Le Pen will probably win, Jospin must be disappointed.

第2に、中核的な副詞節は、話し手が聞き手に対して確認をする機能を持つ付加疑問の要素を認可することができない。例えば、(6 a-b) に見るように中核的な副詞節の中には副詞節の主語と一致する付加疑問文は生じることが不可能であり、付加疑問の要素は、主節と一致する。一方、周辺的な副詞節は、(6 c-d) に見るように、付加疑問の要素を認可することができ、周辺的な副詞節をまたいで、主節に呼応する付加疑問文はできない。

- (6) a. *Bill took a degree at Oxford while his children were still very young, were't they?
b. Bill took a degree at Oxford while his children were still very young, didn't he?
c. Bill took a degree at Oxford, while his daughter is studying at UCL, isn't she?
d. *Bill took a degree at Oxford, while his daughter is studying at UCL, didn't he?

第3に、周辺的な副詞節には、話し手の発話行為 (speech act) を表す *frankly* 等の副詞が生じることが可能である。例えば、(7 a) においては、命題内容に対して話し手がとる心的な態度が *frankly* という副詞で表わされている。一方、中核的な副詞節においては、(7 b) に見るように、この種の副詞が認可されることはない。

- (7) a. [A referendum on a united Ireland] …will be a ‘good thing, because frankly they need to be taken down a peg and come down to earth and be a little bit more sober in their approach to things.’ (Guardian, 22.7.2, page 4, col 4)
b. *I didn't drop the class because frankly I didn't like it, I dropped it because it was too expensive.

第4に、中核的な副詞節においては、(8 a) に見るように、項の主題化 (topicalization) が不可能であるが、周辺的な副詞節においては、(8 c) に見るように、項の主題化が許される。(ちなみに、副詞節内においては、非項の主題化は、項の場合より制限が緩やかで、(8 b) に見るように、中核的な副詞節においても可能である。)²⁾

- (8) a. *If these exams you don't pass you won't get the degree.
b. If next week you cannot get hold of me, try again later.
c. If these problems we cannot solve, there are many other things that we can tackle immediately.

以上をまとめると、次のようになる。認識の法助動詞、付加疑問要素、発話行為の副詞、項の主題化に関して、英語の中核的な副詞節には、これらの要素が生じることがない。一方、英語の周辺的な非副詞節に関しては、これらの要素が認可される。

3. 話し手と聞き手が関わる統語構造

これらの現象に共通しているのは、話し手（＝法助動詞、発話行為の副詞）や聞き手（＝付加疑問要素）が関与しているという事実である。Haegeman は、これらの違いを、次のように捉える。

(9) 周辺的な副詞節：話し手の要素を認可するポジションが CP の中にある。

中核的な副詞節：話し手の要素を認可するポジションが CP の中にある。³⁾

つまり、周辺的な副詞節は、話し手の関与するポジションが CP の談話領域にあるため、そのポジションの要素によって話し手の関与する副詞等を認可することが可能となる。（ここでは、認可という用語を、指定部主要部一致の構造ではなく、認可詞と認可される要素の間に結びつきがあるくらいの緩やかな意味で用いられている (Haegeman (2006))。一方、中核的な副詞節は、話し手の関与するポジションが CP の中にある。そのため、話し手の関与する副詞等が中核的な副詞節の中では認可されない。

では、具体的に、話し手や聞き手の要素を認可する CP 内のポジションや要素とは何であろうか。これには、2つの意見がある。一つは、Haegeman(2006)の主張で、話し手や聞き手のポジションは、一番左端の ForceP にある。（しかし、これでは、話し手と聞き手の、ポジションの区別がつかない。この区別をした提案としては、Tenny (2004) がある。Tenny は、ForceP を Speech-

actP と EvidentialP に分解して、前者に、話し手と聞き手のポジションを設定している。) 2つ目のアプローチとしては、Speas (2004) や Haegeman (2008) がある。この考えは、次に見る Cinque (1999) が提案する機能範疇の階層 (以下 Cinque 階層と呼ぶ) が、話し手や聞き手が関わるポジションと考える立場である。

- (10) [*frankly* Mood_{speechact} [*fortunately* Mood_{evaluative} [*allegedly* Mood_{evidential} [*probably* Mod_{epistemic} [*once* T (Past) [*then* T (Future) [*perhaps* Mood_{irrealis} [*necessarily* Mod_{necessity} [*possibly* Mod_{possibility} … (以下省略) (Cinque 1999)

この Cinque 階層は、様々な副詞類が認可される指定部や主要部のポジションを表している。例えば、(11) に見るように、*frankly* という speech-act に関わる副詞は、一番高い speech-act に関わるムード階層の主要部によって認可され、その指定部の位置を占める。一方、助動詞 *may* は、話し手の認識を表す epistemic のムード階層の主要部に生じる。さて、speech-act に関わるポジションは、聞き手に関わるポジションを含む。というのも、speech-act は、話し手が聞き手に対してする発話の内容を表すので、聞き手を想定してからである。

- (11) *frankly* : speech-act に関わる副詞

Speech-act Phrase の中に話し手と聞き手のポジションがある。⁴⁾

一方、それより低いムードに関わるポジションは、聞き手の情報を含まない。⁵⁾ 例えば、epistemic のムードに関わる EpistemicMoodP のポジションを見よう。(12) に見るように、この epistemic のポジションは、聞き手を含まない話し手のポジションと考えることが出来る。というのも、認識に関わるムードは、聞き手を想定せずに、話し手のみが関与する心的態度を表すからである。

- (12) *probably*: epistemic に関わる副詞。

聞き手を含まない話し手のポジションで、聞き手を想定せず、話し手のみが関与。

さて、この Cinque 階層には、上の階層が下の階層を活性化する (activate) という規則性がある。例えば、(12) に見るように、speech-act に関わるムードの機能範疇は、Cinque 階層の最上位に位置し、それよりも低い epistemic や evaluative に関わるムードの機能範疇のポジションも活性化されている。(しかし、下の階層のポジションが活性化されても必ずしも上の階層のポジションを活性化することはない。) つまり、「あるポジションが活性化されると、その下のポジションも活性化される」という規則性／ルールがあるといえる。⁶⁾

(13) speech-act に関わるムードのポジションが活性化。⁷⁾

→ epistemic に関わるムードのポジションが活性化。

本論のテーマとなっている話し手と聞き手の両方が関与する周辺的な副詞節は、(14) に見る speech-act のムードのポジションが活性化されている、と考えることが出来る。つまり、中核的な副詞節においては、speech-act のムードのポジションが活性化されていない。

(14) 周辺的な副詞節の内部構造：Mood (speech-act) …Mood (epistemic) …

中核的な副詞節の内部構造：

TP…

周辺的な副詞節においては、speech-act のムードに関わるポジションが活性化されているので、Mood (speech-act) の指定部の位置で、speech-act の副詞 frankly が認可されることになる。また、この speech-act のポジションが活性化されると、上で述べたルールによって、その下のポジションも活性化されるため、それよりも低い epistemic のムードのポジションも活性化され、Mood (epistemic) の指定部の位置で、認識のムードを表す副詞 probably も認可されることが可能となる。この理由で、周辺的な副詞節には、speech-act に関わる副詞も epistemic のムードに関わる副詞も生じることが可能となる。一方、中核的な副詞節においては、ムードのポジションが活性化されないため、ムードに関わる副詞は生じることがない。

ちなみに、Cinque 階層を用いると、従属節の精密な分析が可能となる。例えば、Kajita (1976: 167) によれば、次に見るように、非制限的な関係詞節には、frankly 等の speech-act の文副詞が生じることが可能である。

(15) John, who, frankly, was incompetent, was fired.

つまり、中核的な副詞節は、非制限的な関係詞節と同じサイズの階層構造が活性化されている。これに対して、(16) に見るように、制限的な関係詞節には、frankly 等の speech-act の文副詞が生じることが不可能である。

(16) *The only paper [that, frankly, I didn't understand] was yours.

Kajita によれば、epistemic タイプに属する probably 等の副詞は、この環境に生じることが可能である。この点で、制限的な関係詞節は、中核的な副詞節よりも、より大きな領域が活性化されている。⁸⁾

これを Cinque 階層の視点から見ると、非制限的な関係詞節においては、speech-act のムードが活性化されているので、上で見たルールにより、その下の階層の epistemic 等のムードも活性化され、speech act に関わる副詞も、epistemic に関わる副詞も認可される、と言える。一方、制限的な関係詞節は、epistemic のムード階層のポジションのみが活性化されており、その上の speech-act のムードは、活性化されていない。そのため、speech act に関わる副詞は認可されない。

(17) 周辺的な副詞節の内部構造：Mood (speech-act) …Mood (epistemic) …
制限的な関係詞節の内部構造：Mood (epistemic) …

この Cinque 階層のアプローチは、Kajita の考え方に対して、新しい問題を提示する。Cinque 階層によれば、speech-act のポジションと epistemic のムードのポジションの間には、evaluative と evidential のポジションがある。そのため、その中の、どこまでが活性化されているかという問題である。この点を

検証してみよう。次に見るように、2人のインフォーマントによると、制限的な関係詞節において、evaluativeの副詞は多少文法性が落ち、それよりも低いevidentialの副詞は、文法的となる。

(18) The only paper that, *frankly/?unfortunately/ allegedly/probably, I didn't understand is yours.

ここから、制限的な関係詞節の内部構造に関するより正確な記述は、次のようになる。

(19) 制限的な関係詞節の内部構造は、Mood (evidential/evaluative) 階層のポジションが活性化されている。⁹⁾

さらに、Kajitaによれば、believe等の動詞に埋め込まれた補文は、speech-actのムードに関わる副詞frankly等を含むことが出来ないが、それよりも低いepistemicのムードの要素は、その中に生じることが可能である。

(20) *John believes [that, frankly, I didn't understand Bill will win].

では、speech-actのポジションとepistemicのポジションの間にある、evaluativeとevidentialのポジションの副詞はthat補文に生じることが可能であろうか。2人のインフォーマントによると、いずれも非文法的となる。

(21) *John believes [that, *fortunately/*allegedly, I didn't understand, Bill will win].

ここから、that補文においては、Mood (epistemic) のポジションまで活性化されていると思われるかもしれない。しかし、問題はそれほど単純ではない。というのも、例えば、Haegemanは、factiveの補文には、ムードを表す副詞は一切生じないことを観察している。しかし、分裂文の補文も前提を表すが、インフォーマントによると、いくつかのムード要素は、分裂文の補文に生じて

も、次に見るようにそれほど文法性は落ちない。

- (22) a. ??It was John that fortunately found the valuable book in the old bookstore yesterday.
b. ?It was the exercise that obviously improved the student's oral skill over the year.
c. ? It was John that probably won the first race yesterday.

以上、カートグラフィーにおいて用いられている Cinque 階層が、話し手や聞き手の機能範疇のポジションを含み、経験的にも精密な予測をすることを見た。

⁹⁾ 次節では、この観点と日本語学の観点の接点を概観する。

4. 日本語学との接点

本節では日本語の従属節を英語の副詞節と比較検討する。まず、日本語の文の統語構造を、次の機能範疇の連鎖に着目しながら見よう（例文は、野田（1989）から借用）。

- (23) a. 並べ+られ+てい+なかつ+た+そう+です+よ
b. 述語>ボイス>アスペクト>否定>テンス>対事的ムード>丁寧>対人的ムード
(話し手のムード) (聞き手が関わるムード)

ここでは、述語「並べ」にボイス要素「られ」が後続し、次にアスペクト要素の「てい」が後続している。Baker (1985) によれば、動詞から右に離れていけばいくほど、その要素は、高い階層に属することになり、日本語が、(27b) に見る機能範疇の階層構造を持つことがわかる。

さて、南 (1974) によれば、日本語の従属節は、一番低い階層から見ていき、どの階層までを含めることが可能か、という基準で分類が可能である。具体的には、次に見る A 類から D 類の 4 種類に、日本語の従属節は分類される。

(24)

A類:「を」格、ボイス成分

B類: A類に含まれる要素、「が」格、アスペクト、肯否定、丁寧表現、テンス

C類: A類、B類に含まれる要素、主題、対事的モダリティ (=モダリティ)

D類: A類、B類、C類に含まれる要素、対人的モダリティ (=終助詞)

具体例を見よう。

(25) a. アメを舐めながら (A類)、私は走った。

b. 太郎が来ていなかった時 (B類)、私は家にいました。

c. 太郎は花子に批判されていないようだが (C類)、私は何もませんでした。

d. 太郎は花子に批判されていないようだねと、(D類) 私は言った。¹⁰⁾

A類の従属節には、「を」という一番低いボイス要素を含めることが可能であるが、「アメを舐めながら、私は走った。」のように、その上のアスペクトの要素を含めることは出来ない。次に、B類の従属節には、「てい」のようなアスペクトの成分は生じることは可能であるが、「太郎が来たよう^うだ時、私は家にいました。」のように、その上の話し手のムードを表す対事的モダリティ (=話し手の心的態度を表す) の成分は生じることは不可能である。さらにC類では、「よう^うだ」のような話し手が関わる対事的モダリティに属する要素は生じることは可能であるが、「太郎は花子に批判されていないよう^うだねが、私は何もませんでした。」のように、その上の話し手が聞き手に確認をするという対人的モダリティ (=聞き手が関わる話し手の心的態度) の要素は、生じることは不可能である。最後にD類の従属節は、対人的モダリティの要素である終助詞の「ね」を認可することが出来る。¹¹⁾

さて、本論文で重要なのは、C類とD類の分化である。まず、話し手のムードを表す「よう^うだ」というムード表現が生じるのが、C類とD類の従属節には可能であるが、話し手が聞き手の確認を促す終助詞を含む要素は、D類の従属節にのみ可能である。つまり、話し手だけが関与するムードと聞き手をも巻き込むムードが日本語の副詞節では分化している。

一方、Haegeman は、話し手のムード表現と聞き手も関わる話し手の確認表現話が、共に英語の周辺的な副詞節に属するとした。つまり、話し手だけの関与する副詞節と、聞き手も関与する副詞節は分化していないことになる。ここで、英語の副詞節でも、日本語の話し手だけが関与する要素を許す C 類と聞き手をも巻き込む要素を許す D 類の分化があるのではないだろうか？という疑問が生じる。以下、この可能性を論じる。

まず、Liliane Haegeman (私信) によれば、次に見るように、英語の周辺的な副詞節は、主節の前と後ろの 2 つのポジションに生じることが可能であり、どちらの環境においても、副詞節内に話し手のムードを表す要素が生じることが可能である。

(26) …周辺的な副詞節…主節…周辺的な副詞節…
(話し手のムード) (話し手のムード)

しかし、副詞節内に付加疑問文が生じると、もはや周辺的な副詞節は、主文の前に生じることが不可能となる。

(27) …周辺的な副詞節…主節…周辺的な副詞節…
(*付加疑問) (付加疑問)

これは、英語の周辺的な副詞節においても、日本語の C 類と D 類の分化が存在すると示していると思われる。つまり、主文に先行する周辺的な副詞節は、C 類の従属度を持ち、話し手のムードを表す要素を持つことが可能であるが、話し手が聞き手に確認をする機能を持つ付加疑問文は生じない。一方、主文に後続する周辺的な副詞節は、D 類の従属度を持ち、話し手のムードを表す要素を持つことも、話し手が聞き手に確認をする機能を持つ付加疑問文を持つことも可能となる。以上をまとめると次のようになる。

(28) 主節の前に生じる英語の周辺的な副詞節：日本語の C 類（話し手のムード／*付加疑問文）

主節の後ろに生じる英語の周辺的な副詞節：日本語の D 類（話し手のムード／付加疑問文）

ここから、英語の副詞節が中核的なタイプと周辺的なタイプの 2 種類に分類できるとした Haegeman (2006) の主張は、より洗練された分類が必要で、実は、英語の副詞節には、少なくとも 3 種類（＝周辺的な副詞節に 2 種類）あることが明らかとなる。この発見は、南 (1974) の日本語学の視点にたって、はじめて可能になると思われる。

5. 局所性

では、なぜ周辺的な副詞節が主節の前に生じると、付加疑問の要素を認可できなくなるのかを考察しよう。この問題を解く鍵は、付加疑問文の統語構造にあると思われる。付加疑問文は、いわゆる yes/no 疑問文を文末に持つのだが、この yes/no 疑問文において、ゼロ演算子が関与しているという可能性が最近示唆されている。例えば、Den Dikken (2006: 729) は、以下 (29a) に見る yes / no 疑問文において助動詞だけが、文頭から 2 番目に V が生じておらず、いわゆる V2 の制約から外れているオランダ語の事実に着目している。彼によれば、yes / no 疑問文において、(29b) に見るように、実は文頭にゼロの演算子が存在し、動詞は V2 の制約を守って、文頭から 2 番目に生じている。

- (29) a Had hij gezegd dat hij zou vertrekken?
had he said that he would leave
- b $[_{CP} OP [_{Vfin} had] [_{TP} Subject \dots t_{op}]]$

本稿では、カートグラフィーの視点から、このゼロ演算子が ForceP という文のタイプを表すポジションをターゲットにして移動していると考えられる。つまり、付加疑問文は、ゼロ演算子が ForceP に移動し、連鎖 (chain) を形成することで、命題部分が、談話に関わる話し手が聞き手に確認をするという文タイ

この表示は、周辺の副詞節に後続する付加疑問要素が、主節と呼応する解釈が不可能となることを表している。この表示が不可能となるのは、局所性の違反によると考えることが出来る。ここで局所性とは、Rizzi (2004) の提案する Relativized Minimality (RM) で、その趣旨は、次の構造において、XとYの間にXと同じタイプの要素Zが介在すると、XとYの間に局所的な関係が確立できない、というものである。

(33) … X…Z…Y…

上の非合法的な表示に、この原則を当てはめると次のようになる。

(34) … [ForceP (主文) … [ForceP (周辺の副詞節) Op 付加疑問要素


この構造においては、ゼロ演算子が、Yの位置からXの位置へ移動しても、間にXと同じタイプのForcePが介在しているために、局所的な関係は確立することが出来ず、合法的な連鎖が形成されない。そのため、周辺の付加疑問の要素は、主文と呼応して、話し手が聞き手に確認をする表示が形成できない。この理由により、文末の付加疑問要素は、周辺の副詞節をまたいで、主文と呼応することが不可能となる。

次に、中核的な副詞節の事例を見よう。前に見たように、文末の付加疑問要素は、中核的な副詞節を飛び越して、呼応することが可能である。この場合、次の構造を持つ。

(36) … ForceP (主文) … [(中核的な副詞節) Op 付加疑問要素

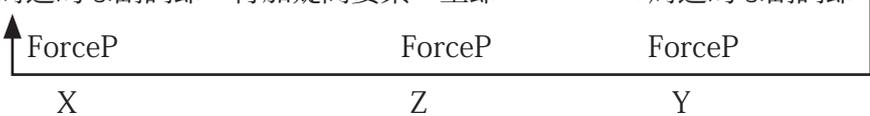

この表示が合法的であるのは、括弧でくくった中核的な副詞節が独立した発話の力を持たないため、ForcePが欠落しているためである。そのため、ゼロ演算子が、文末の付加疑問要素から中核的な副詞節をまたいで、主文のForceP

をターゲットにして移動しても、間に同じタイプの ForceP が介在していないために RM 違反は生じることなく連鎖が形成され、合法的な表示が得られる。この理由により、文末の付加疑問要素は、中核的な副詞節をまたいで、主文と呼応することが可能となる。

次に、文頭に周辺的な副詞節が生じた場合、それが付加疑問の要素を認可できない次の事例を考察しよう。

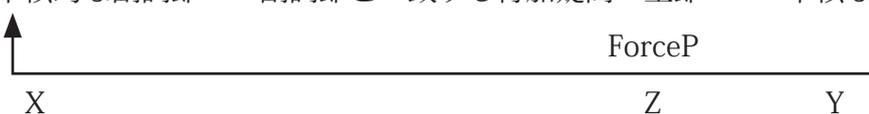
(37) *… [周辺的な副詞節 (ForceP) …付加疑問要素] …主節 (Force) …

この表示の非合法性も、RM から導きだされる。文頭に生じる副詞節は、次に見るように、文末から移動によって生じると考えよう。

(38) …周辺的な副詞節 付加疑問要素…主節 < 周辺的な副詞節 付加疑問要素 >


この表示において、周辺的な副詞節も主節も ForceP を持つので、Y の位置から X の位置に周辺的な副詞節が移動した場合、間に同じタイプの Force を持つ Z (=主文) が介在するため、X と Y の間に局所的な関係は確立されず、非合法的な表示が生み出される。そのため、付加疑問要素を認可できる ForceP を持つ周辺的な副詞節は、文頭に生じることが不可能となる。

最後に、中核的な副詞節が、文頭に生じる事例を見よう。

(39) *…中核的な副詞節 …副詞節と一致する付加疑問…主節 < 中核な副詞節 >


この場合、中核的な副詞節は、独立した発話の力を持たないので、ForceP を持たない。そのため、独立した発話の力を持つ ForceP を持つ主節を飛び越しても、RM 違反は生じることがなく、Y から X の位置に移動が生じることが可

能となる。しかし、ここで中核的な副詞節に後続する付加疑問要素の認可に関して問題が生じる。付加疑問要素は、前に見たように、ゼロ演算子を ForceP に移動させることによって、はじめて命題領域が談話領域と繋がり、話し手が聞き手に確認をする意味解釈が得られる。つまり、次の表示が要求される。

(40) …中核的な副詞節 …Op 副詞節と一致する付加疑問…主節 <周辺的な副詞節>


しかし、中核的な副詞節には、ForceP を持たないので、このゼロ演算子が合法的な連鎖を形成できず、求められている付加疑問の解釈を持つ表示を生み出すことが出来ない。この理由により、文頭に生じる中核的な副詞節は、付加疑問要素を認可することが出来ない。

以上をまとめると、談話において話し手が聞き手に対して働きかけをする統語表示には、ForceP が関与していることを見た。これは、いわゆる主文現象 (root phenomena) である。この主文現象に含まれる他の現象としては、修辞疑問文 (rhetorical question) がある。Lakoff (1987: 474) が観察するように、この修辞疑問文は、文末の副詞節には生じるが、文頭の副詞節には生じることがない。

- (41) a. We should go on a picnic, because isn't it a beautiful day!
 b. Because isn't it a beautiful day!, we should go on a picnic,

この修辞疑問文も、ForceP によって認可されると考えることにより、次のように説明可能となる。文末に生じる周辺的な副詞節には、ゼロ演算子が移動のターゲットにする ForceP があるため、命題領域と談話領域の間に合法的な連鎖が形成される。そのため ForceP にある修辞疑問の文タイプの解釈が連鎖を通して、命題領域につながることが可能となる。

さらに別の主文現象として、話者のコメントを表す speech-act タイプの副詞がある。Hegeman (2008) によれば、この種の副詞は、分裂文の焦点の位置に生じることが不可能である。

- (42) a *It is probably/obviously that he left.
b It was yesterday/only recently that he left.

これは、カートグラフィーの視点から次のように説明可能となる。分裂文は、次に見るように、フォーカスのポジション FocP を持ち、その位置をターゲットにして移動が生じると考えよう。

- (43) It is [FocP XP that…
- 

この構造においては、FocP よりも上の構造は活性化されていないため、話者のコメントを表す副詞を認可することが出来ない。¹²⁾ この理由で、分裂文には、話し手の関与する表現はフォーカス位置には生じることがない。

6. 結論と今後の課題

以上、本論では、次の点を見てきた。

- A) 英語も日本語も、CP 領域に談話に関わる豊かな階層構造を持つ。
- B) 話し手や聞き手に関わる機能範疇のポジションもこの CP 領域にある。
- C) 英語の副詞節に 2 種類あるという Haegeman (2006) の主張とは異なり、副詞節には 3 種類ある。

本論の日本語学の視点を盛り込んだカートグラフィーのアプローチにより、従来の英語学研究よりも洗練された精密な従属節や副詞節の分析が可能になった。

最後に、今後の課題を見よう。日本語の従属節は、南よりもさらに詳細に分類可能であるという主張が野田 (1989) によってなされている。この詳細な分類が英語でも可能であるかは今後の研究課題である。これと関連するのが、英語学における Nakajima (1982) の V4 システムで、そこにおいては、英語の副詞節が 4 種類に分類されている。この Nakajima の分類は、副詞節が、主

文のどの高さの要素と結びついているかという外側の視点のみからなされている。ここで欠落しているのが、本稿で見た内側の視点で、この4種類の副詞節の中に生じる要素とそこで活性化される機能範疇文の相関性は議論されていない。この点も今後の研究課題である。これらの問題を解決するためには、カートグラフィーの研究者、日本語学の研究者、英語学の研究者の連携が必要であると思われる。

References

- Baker, Mark. 1985. "The Mirror Principle and Morphosyntactic Explanation." *Linguistic Inquiry* 16: 373-415.
- Chiba, Shuji. 2003. Licensing conditions for sentence adverbials in English and Japanese. Empirical and theoretical investigations into language. pp.95-109.
- Cinque, Guglielmo. 1999. Adverbs and functional heads: A cross-linguistic perspective. Oxford: Oxford University Press.
- Dikken, Marcel den. 2006 Either float and the syntax of co-ordination. *Natural Language and Linguistic Theory* 24, 689-749.
- Endo, Yoshio (遠藤喜雄). 2006. A Study of the cartography of Japanese syntactic structures. Ph.D. dissertation, University of Geneva.
- Endo, Yoshio (遠藤喜雄). 2007. *Locality and information structure; a cartographic approach to Japanese*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 遠藤喜雄. 2008. 「普遍的な統語構造地図における日本語の終助詞」『文の構造と機能と統語論：日本語の主文現象からの提言（1）』平成19年度～平成21年度 日本学術振興会 科学研究費補助金（基盤研究（B）研究成果報告書（課題番号19320063）研究代表者 長谷川信子）.
- Fairclough, Norman.1973. Relative clauses and performative verbs. *Linguistic Inquiry* 4, 526-531.
- Hegeman, Liliane.2006. Clitic Climbing and the Dual Status of *sembrare*, *Linguistic Inquiry* 37, 484-501.
- Hegeman, Liliane. 2008. The movement derivation of conditionals. MS. University of Ghent.
- Hirose, Yukio. 1991. On a certain nominal nature of because-clauses. *English Linguistics* 8: 16-33.
- 久野暉. 1978. 『談話の文法』大修館書店.
- Lakoff, George. 1987. Women, fire and dangerous things. Chicago: university of Chicago

Press.

Kanetani, Masaru. 2007. Focalization of *Because* and *Since*. *English Linguistics* 24, 2: 341-362.

西垣内泰介. 2008. Reflexive binding as control into POV projections. MS. In progress, Kobe Shoin.

中右実. 2004. 『認知意味論の原理』大修館書店.

Rizzi, Luigi. 2004. Locality and left periphery. In *Structures and beyond*, A. Belletti (ed), 104-131. Oxford: Oxford University Press.

注釈

- 1) 本稿の初歩的な原稿は、2008年10月に神田外語大学で開催された井上ゼミ、2008年11月に筑波大学で開催された日本英語学会のシンポジウム「統語と談話のインターフェイス」、2008年12月に津田塾大学で開催された言語文化研究所プロジェクト第44回研究会で発表された。本稿では、それら発表の一部を取り出し大幅に修正を加えた。これらの集まりに参加して下さった方々、とりわけ以下の方々からは、貴重なコメントをいただいた。ここに感謝の意を表したい（敬称略）：井上和子、高橋将一、岸本秀樹、竹沢幸一、野田尚史、長谷川信子、池内正幸、千葉修司、野村忠央、本多正敏。尚、本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）『文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言』（研究代表者：長谷川 信子）の補助を得て成されている。
- 2) 周辺的な副詞節の中に生じる主題化表現は、あまり頻度が高くない。およそ390ページの小説をチェックしてみたところ、以下の1例しか非項の主題化の実例は見いだされなかった。項の主題化の事例はゼロであった。
 - (i) Once gain, Borel and Selberg had arranged a one-year membership at the Institute for Advanced Study, although this time they did so with less hope. (Sylvia Nasar 著 *A Beautiful Mind*; pp. 308)もう1例、以下の挿入の用法で、非項の主題化の事例が見いだされた。
 - (ii) And while, years later, Nash often referred to pleasant aspects of the delusional state, it seems clear that these waking dreams were extremely unpleasant, full of anxiety and dread. (Sylvia Nasar 著 *A Beautiful Mind*; pp. 326)
- 3) Haegeman は、周辺的な副詞節において、主題化された要素が収まるべきポジションがCP領域にあるとしている。この考えによれば、制限的な副詞節において、主題化される

要素が認可されないのは、主題化される要素が収まるべきポジションが無いためである。

- 4) カートグラフィーでは、Speech act のムード表現は、CP 領域にあるよう見えるが、正確には、TP / TP 領域にある。DP は、副詞の前のポジションに移動すると考えられている (Cinque 1999 109-111, 2006 134-135)。
- 5) 日本語において、ある要素に聞き手が関与しているかは、仁田 (1991) の「~と思う」テストによって判別可能である。この「~と思う」という表現は、話し手がある命題内容に対して持つ心的態度を表す表現なので、専ら話し手のポジションに属する要素のみが求められる。そのため、次に見るように、「です/ます」といった聞き手を想定する丁寧表現や「~するつもり」という表現は、このテストに合格しない。
 - (i) *行きますと思った。 / *行くつもりだと思った。
- 6) Evaluative は、話し手による評価を表す。西垣内 (2008) によれば、日本語では、「してしまった」で表される主観的な判断の表現が Evaluative に属する。
- 7) 活性化の違いは、各従属節の主要部による選択 (selection) によるが、正確には、活性化されたポジションの選択と考えられる。活性化されていないポジションがあるか否かは議論が分かれると思われる。
- 8) Fairclough (1973:523) によれば、次に見るように、関係詞節の先行詞が a の場合、関係詞節の内部に *frankly* を含めることが可能である。
 - (i) John has bought a painting that *frankly* I find rather ugly.Fairclough によれば、a は the と異なり、話し手は、それに後続する関係詞節の内容が、既知であることを表わしていない。そして、speech-act の副詞は、話し手が既知の内容を述べるのではなく、新たに提示する機能を持つ。そのため、the とは異なり、*frankly* が生じることが可能となっているという。Chiba (2003:105) は、この点に言及して、見かけは制限的な関係詞節が、その内容として新情報を提示する機能を持つという趣旨の興味深い示唆を行っている。これをカートグラフィーの枠組みで見ると、関係詞節において移動するゼロ演算子が FocP をターゲットにして、量化タイプの連鎖を形成すると考えることが出来る。この連鎖は、Rizzi (2004) によれば、副詞とは異なるタイプに属するので、RM の局所性違反は生じない。
- 9) Haegeman は Rizzi の枠組みをそのまま踏襲して、聞き手の関わるポジションを ForceP に求めている。

- ¹⁰⁾ このD類は、引用節と考えられるかもしれない。しかし、「太郎は彼が馬鹿だと言った。」という文において、「一と」という節は引用ではない。なぜなら、引用節であれば、「俺／私は馬鹿だと」となるからである。同様に、「太郎はジュネーブに昨日行つもりだと言った」という文においても、「一と」という節は引用ではない。なぜなら、引用節であれば、「ジュネーブに明日行つもりだ」となるからである。
- ¹¹⁾ Haegeman (2006) によると、焦点要素は、制限的な副詞節において認可されない。その説明として、制限的な副詞節は、焦点を認可する Foc よりも下のポジションのみを持つためとされている。面白いことに、野田 (1989) に、TP に相当する B類において、焦点要素が生じる例が観察されている。
- (i) 結婚はしたがまだ子供が生まれていなかった時。
これは、焦点のポジションが、日本語では、CP の領域から TP の主要部に降りて来ているためと考えられる。
- ¹²⁾ 中右 (1994:162) によれば、causal because は、分裂文の焦点に生じないが、inferential because は焦点のポジションに生じることが可能である。
- (i) It's because he's sick that he's coming to class.
(ii) *It's because his wife told me that he's not coming to class.
この事実は、inferential because が話者のコメントを表し、ForceP によって認可されるためと考えられる。つまり、カートグラフィーの視点では、このような speech-act に関わる構文も、Speech-actPhrase の話し手のポジションによって認可されると考えることが出来る。また、Hirose (19991) によれば、causal because は、文頭に生じることが可能だが、inferential because はそれが不可能である。
- (iii) Because it has rained, the ground is wet.
(iv) Because it has rained, it has rained.
これは、RM により文頭の because 節が、ForceP を持たないためと考えられる。この点については、Kanetani (2007) も参照のこと。